令和七年度

滝川第二中学校　入学考査　問題

A2日程

国語

（四十分・百点）

注意事項

1　問題は1ページから15ページまであります。
2　解答は、すべて解答用紙の枠内に記入しなさい。
3　「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
4　受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
5　「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

受験番号							氏　　名
		—					

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

頭の中に知識があることは、新たに色々な問いを生み出すことにも役立ちます。勉強には、身につけるべき知識があって、それを学んでいく「習得型」の学習と、①自分で問いを作りながら、新しいものを作り出していく「探究型」の学習があると言われています。（　Ⅰ　）、毎日やっている教科の勉強は、教科書に載っている知識や技能を身につけていくことが目標となっているので、基本的には「（　A　）」の勉強といえます。一方で、夏休みの自由研究などは、身につけるべき知識が決まっておらず、みなさん自身でテーマを設定して進めていくタイプの学習なので、「（　B　）」の勉強といえるでしょう。

この二つのタイプのうち、現在では（　C　）の学習の重要性が高まっています。教科の勉強のほかに、総合的な学習の時間が設置されており、新しい学習指導要領でも、調べること、考えること、表現することの重要性が指摘されています。

社会のめまぐるしい変化に柔軟に対応しながら生きていくためには、学校で扱う色々な教科の知識を身につけるだけではダメで、（　a　）が必要だといったことがさかんに議論されています。人工知能（ＡＩ）が発達する中、「コンピュータやＡＩが色々な情報を提供してくれるので、これからの勉強では、それらを使いこなして新しいものを生み出す力を大切にするべきだ」といった風潮は、今後さらに強くなっていくと思われます。

しかし、本当にそうでしょうか。自分で問いを作り出す力、問いについて探究する力が大切だからといって、（　D　）の勉強が必要ないわけではありません。（　Ⅱ　）、わたしたち人間は、「知識があることで深く考えることができる」からです。

心理学の中には、問いを作ることに注目した研究もたくさん行われています。そうした研究では、わたしたちが疑問や質問を思いつくまでの流れについて議論されてきました。その中で、新しい情報と、自分の知っていること（頭の中にある知識やイメージ）がうまく噛み合わなくてモヤモヤした状態を通じて、わたしたちは「問い」を作り出していく、という考え方が主張されています。このモヤモヤした状態は「認知的不協和」の状態とも言われていて、そのモヤモヤが形になって、問いが作られていくわけです。

となると、②問いを思いつく時にも、頭の中に知識があること

が前提になります。たとえば、インターネットで情報を探索したとしましょう。先ほど説明したように、そこで得られた情報を理解するためには知識が必要です。しかし、得られた情報から自分のオリジナルな問いを生み出していくためにも、やはり知識が必要です。目の前の情報と自分の知識が噛み合わないことがきっかけとなって問いが生まれるからです。

実際、実験参加者が作り出す問いに注目した研究では、テキストの内容についてまったく知識がない人と、知識をたくさん持っている人では、後者の方が多くの問いが出せることが報告されています。

この結果は、ものすごく単純に考えると、変な感じがします。知識がない人の方が、知らないことだらけなわけですから、問いがたくさん出てくると考えられるからです。しかし、「新しく学んだ情報と、自分が知っていることを照らし合わせて、うまく噛み合わない時に問いが生まれるのだ」と考えると、こうした実験の結果もつじつまが合います。

③こうした話をふまえると、「考える力を身につけるためには、知識を身につける必要はない」と考えるのは間違いであって、「考える力を身につけるためにもたくさんの知識を身につけておく必要がある」ことがわかるのではないでしょうか。

先ほど説明したように、認知心理学では、豊富な知識を持っているほど新しいことを理解でき、多くの問いも作り出せるということが知られています。このように、とても大切な役割を果たしている知識ですが、日本の教育では、この知識があまり大切にされていなかった時期がありました。それが、いわゆる「④ゆとり教育」の時代です。

１９６０年代や１９７０年代の高度経済成長期では、とにかくたくさんの知識を身につけて、いい大学に入って、いい企業に入ることが大切でした。その結果、ものすごく激しい受験競争が起こってしまい、競争へのプレッシャーから、いじめや不登校などの問題が発生しました。こうしたことへの反省から、プレッシャーを感じずに勉強ができるように、「ゆとり教育」が展開されるようになったのです。

この時、※文部省は「新しい学力観」というスローガンを掲げて、「基礎基本的な知識だけでなく、思考力や意欲も学力に含めよう」といったことを主張しました。その際、この方針を聞いた学校では「知識だけではなく思考力や意欲も大切」という点を「知識よりも思考力や意欲が大切」と受け取ったのです。

そのため、毎日行われる授業も「指導」ではなく「支援」へと移行していくようになりました。先生が教えてしまっては知識の詰め込みになってしまうので、なるべく教えずに、子ども自身の学習意欲を尊重して、子どもの思考を支援することを大事にするようになったわけです。

（　Ⅲ　）、思考には知識が必要なことは先ほど説明したとおりです。

基礎基本的な知識よりも、応用力が必要になる問題で構成されている、国際的な学力調査ＰＩＳＡ（経済協力開発機構が３年ごとに実施）というテストがあります。ゆとり教育が展開されていった期間、⑤このテストの成績がとても悪くなってしまったのです。ゆとり教育が展開されたのは１９９０年代で、その方針を継続した２０００年代に、日本は成績を大きく落としてしまいました。（　Ⅳ　）、このテストでは学習意欲についてアンケートも行っているのですが、日本の生徒の学習意欲は最低レベルであることもわかりました。

この結果は当時の日本にとってものすごくショックなものでした。これまでの詰め込み教育を反省して、思考力や学習意欲を大切にして教育してきたのに、それが身についていないどころか、悪くなっていることが示されてしまったからです。そのため、文部科学省は「基礎基本的な知識や技能」「思考力・表現力・判断力」「学習習慣」の三つを重要な柱にして、これらをバランスよく身につけていくことが大切だとしました。この時に立てた基本的な方針が今でも続いているというわけです。

（篠ケ谷圭太「使える！　予習と復習の勉強法――自主学習の心理学」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　文部省…現在の文部科学省。

問一　――線部①「自分で問いを作りながら、新しいものを作り出していく」とありますが、そのような学習は何のために必要ですか。本文中から二十八字で探し、それぞれ最初と最後の四字を書きぬきなさい。

問二　（　Ⅰ　）～（　Ⅳ　）に入ることばとして適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）

ア　しかし　　イ　また

ウ　たとえば　　エ　なぜなら

問三　（　A　）～（　D　）に入ることばとして適当なものを、次のア・イから選び、記号で答えなさい。

ア　習得型　　イ　探究型

問四　（　a　）に入ることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　自宅や塾（じゅく）などでの、発展的な知識を身につけるための勉強

イ　周囲の年長者からの伝聞により、知識を深めること

ウ　自分で問いを見つけ、自分でそれを解決していく力

エ　世の中の動きを、親など身近な大人に教えてもらうこと

問五　――線部②「問いを思いつく時にも、頭の中に知識があることが前提になります」とありますが、それはなぜですか。本文中から三十九字で探し、それぞれ最初と最後の四字を書きぬきなさい。

問六　――線部③「こうした話」とありますが、これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、【ア】は六字、【イ】は十字、【ウ】は十三字で、本文中から書きぬきなさい。ただし、二つある【ア】には同じことばが入ります。

心理学では【ア】の状態が形になって問いが作られていくという考え方が主張されており、【イ】より【ウ】のほうが【ア】が強くなるため、多くの問いが出せるという話。

問七　――線部④「ゆとり教育」とありますが、学校の授業ではどうすることが重視されましたか。本文中から二十九字で探し、それぞれ最初と最後の四字を書きぬきなさい。

問八　――線部⑤「このテストの成績がとても悪くなってしまったのです」とありますが、なぜですか。これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、本文中から六字で書きぬきなさい。

知識だけに偏（かたよ）らないようにするという方針を、知識より【　　】を重視すべきだと学校現場が受け取ったから。

問九　次の**ア**～**カ**について、本文の内容と合致（がっち）するものには○、合致しないものには×をつけなさい。

ア　コンピュータやＡＩが提供する情報を使いこなして新しいものを生み出す力を重視する風潮が、これからの学習でさらに高まると考えられる。

イ　２０００年代に実施されたＰＩＳＡにより、ゆとり教育によって応用力が大きく落ちたほか、学習意欲が育まれなかったことがわかった。

ウ　インターネットで得た情報を理解するためには知識は必要ないが、自分のオリジナルな問いを生み出していくためには知識が必要である。

エ　詰め込み教育によって、いい大学や企業に入ることを目指した結果、競争へのプレッシャーが過多になったことへの反省から、ゆとり教育が行われた。

オ　コンピュータから解決策を見つけるのは難しいが、ＡＩはより明確に解決策を提示してくれるため、ＡＩ化がさらに進めば知識は必要なくなる。

カ　文部科学省の現在の方針は、「基礎基本的な知識や技能」が最重要で、それに次ぎ、「思考力・表現力・判断力」と「学習習慣」が必要だというものだ。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

「廃部寸前の軽音楽部を立て直し、学園祭での演奏を目標にする啓人、伸太郎、勇作、徹の四人は部段と呼ばれる屋上に繋がる階段の踊り場で日々猛練習に明け暮れる。」

橙色の空の下、無駄話に興じるばかりでなかなか自転車に乗ろうとしない二人を、伸太郎が急かした。

「啓人、いいかげん帰ろうぜ。※大野も早めに家に戻った方がいいぞ」

自転車に跨ろうとした伸太郎の首に、徹の長い腕がするすると巻きついた。

「えーっとね、これから野球部太鼓の※チューニングやろうかと思うんだけどさあ、伸太郎もつきあって」

「なんでオレが」

勇作が口を挟んだ。

「それはもちろん、叩くの伸太郎の役だから」

「明日でもいいだろ」

渋る伸太郎に、徹は台詞を思い出すようにたどたどしく答えた。

「んー、でもそういうのは、暑くない夕方の方がやりやすいんだよ」

「ぼくも付き合う。あのボワンボワンいう無茶苦茶なチューニングは許しがたい」

伸太郎から強引にハンドルを奪い取った勇作が、①含みのある微笑みを啓人に向けてきた。

「ちょっと待てよ。オレ、家帰ってナイター見てえよ」

伸太郎が虚しい抵抗を試みたが、徹は何食わぬ顔でその肩を（　A　）押し続けながら言った。

「あ、伸太郎は野球見るんだ。奇遇だねえ、おれは見ないんだ」

「じゃあそういうことで、ちょっと部段寄ってくね」伸太郎の自転車を片手で押しながら、勇作は立ち尽くす啓人を振り返った。

「あ、そうだ。このへん、いまくらいの時間になると痴漢出るの知ってた？」

「はい？」

伸太郎を連行した二人はほどなく校門の中へと消え、安田商店の前には啓人と亜季だけが取り残された。

困ったことになってしまった。

五人でいたときはすらすら出てきた言葉が、蛇口を締めたように（　B　）止まってしまった。何か言わなければと思えば思うほど、何を話せばいいのかわからなくなってくる。まして、「痴漢が出る」などと、気をきかせたつもりの性質の悪い冗談を言われたあとではなおさらだった。

亜季が変質者に襲われる姿など、想像するのも嫌だった。一撃のもとに撃退してしまいそうな気がしなくもないが、それでも、万が一のことを考えると気が気ではない。

「日が沈むね」

西の空を見上げ、亜季が言った。高い堤防の上に夕日が差し掛かっている。

緊張感を微塵も感じさせないその声に、②啓人は不思議な安堵を覚えた。

「大野の家って、どっち方面？」

サイクリングロードとして舗装された堤防は、息苦しいほどの夏草の匂いに満ちていた。

堤防の西側もまた、高校の周囲と同じように水田が広がっている。川そのものは治水のため明治年間に整備されたという堤防の遥か遠くにあり、目を凝らしてもその流れはよく見えない。しかし氾濫原全体の眩さが、光を乱反射させる大きな川面がたしかにそこにあることを教えていた。

「うー、想像以上に陽射しが暑い」左どなりを歩く亜季は、まだまだ余力を感じさせる西日に顔をしかめた。「川の向こうに沈む夕日を見ながら堤防を歩いて帰るのって、一度やってみたかったんだ。でも、現実は過酷だった。あっつい」

「夏だからね」

あまりにも工夫のない台詞に、啓人は我ながら落胆した。西日を浴びる右半身に、③暑さだけが原因ではない汗がふつふつと浮かんでくる。

人の気配を察知したイナゴが、気ぜわしい羽音を立てて土手の下へ跳んでいった。

ちらりと横を見る。たしかに亜季が自分のとなりを歩いている。

④これはチャンスだ。何の？　心の中で一人相撲を続けていると、亜季が口を開いた。

「ごめんね、変な夢実現のために付き合わせちゃって。下の道通った方がずっと近いんだけど」

「いや、いいよ。あっちは交通量多いし」

ひどく言葉少なでぶっきらぼうになっている自分が、もどかしくて仕方がなかった。自転車のハンドルを握る手に余計な力が加わる。

「⑤怒ってる？」

首をすくめた亜季が、窺うように見上げてきた。

「え？　怒ってない怒ってない」

啓人は背中のソフトケースが揺れるほど大きく首を振った。

「ならいいけど」

「それにしても、よく食うね」

話題づくりを焦った挙句に出てきた台詞は、デリカシーの欠片もないものだった。さらに汗が浮かぶ。

「だって水泳部だもん。⑥恐竜並みのカロリー摂取量ですよ、あたしたちは」

亜季は片手でぽんぽんと腹を叩いた。相手の方が一枚も二枚も上手のようだ。

「晩飯の時間は？」

「もちろん食べるよ。だから、健康と美容の秘訣は『食うだけ食ったら出すだけ出す』。これですな」

雀除けの空砲が、遠くで（　C　）鳴った。

「……」

「そこで黙るなよお。なんか冗談言って切り返してよ。あー、恥ずかしい」

「そう言われても……」

内容はともかく、おかげで少しぎこちなさが薄れた。

亜季が尋ねた。

「軽音のレパートリーって、何曲くらいあるの？」

「うーん、マスターしたって胸張って言えるのは十曲ちょっとかな。もし、タイトルとか知りたい曲があったら聞いて」

「あ、じゃあ、あれはなんていうの？　あの、歌から始まって、途中から伴奏がワッて入ってくるやつ。なんかこう、『青春のせつなさ』みたいな甘酸っぱーい感じのメロディーで、ちゃーらららっらー、らーらっらーらーらーっていうの」

「『バスケット・ケース』！」

つい、大声になってしまった。初めて会った去年の秋、たった一度アンプを鳴らして亜季に弾いた曲だ。

「あー、びっくりした」

「あ、ごめん。えーと、『どぅーゆはゔだたい・とぅーりっすんとぅみーぅわいん』……でしょ？」

「そう、それ。あたしはあれが大好き。えーと、バスケット――？」
「ケース。グリーン・デイっていうバンド。もしよかったら、こんどCD持ってくるよ。俺もあの曲のせつない感じとか、好きなんだ。でも、訳詞読んだら肩透かし食うかも。『青春のせつなさ』っていうより、『ぼくの泣き言を聞く時間はあるかい』で始まる、精神的に追い詰められた男の歌だから」
「へー、そうだったんだ、知らなかった。なんていうかもっと、ボーイ・ミーツ・ガール風の歌かと思ってた」
「向こうのロックの歌詞ってそんなのばっかりだよ、とくにパンクは。『あのガキをブン殴ってやれ、野球のバットで。オー、イエー』とか」
「なにそれ」
亜季は前屈みになって笑った。
「例のラモーンズの曲。伸太郎に歌わせたらいちばん似合いそうだよね」
「たしかに。プールに殴り込みに来たときなんて、ほんとにバット持ってそうだった」
肌を直接圧迫するようだった西日はいくぶん力を弱めていた。太陽と同じ色に染まった水田の中を、農作業用軽トラックの長い影が（　D　）走っている。今が夏の盛りだが、夕日に照らされて黄金色に染まった世界には次の季節の気配が含まれていた。
お互いに名前も知らなかったあの日のことを、亜季は憶えているのだろうか。
直接尋ねられるのは、今しかない。
「あの、『バスケット・ケース』だけは、去年も弾いたことあるんだけど――」
「あ、階段に座ってたでしょ。去年の、文化祭が終わってちょっと経った頃だっけ」
亜季は、思いがけず即答した。
「憶えてたんだ。だから俺、二年になってびっくりしたんだよ。『あ、あのときの』って。大野って去年一年間でたった一人だけの、俺のギター聴いてくれた人だから。だから俺は、そのときまだ名前も知らなかったけど、大野の顔はずっと憶えてた」
⑦なかなか重大な告白をしたつもりだったが、わかっているのかいないのか、亜季はあっけらかんと答えた。
「あー、あのときの曲がそうだったのかあ。なんか聴きおぼえがあると思った。……えー、ひとつ、白状してよろしいでしょうか」
「なんでしょう」

「神山くんの顔までは、はっきりとは憶えてなかった」
「……ああ、そうですか」
「同じクラスになって、『あの人ってたしか、ギター弾きのあの人じゃなかったっけ』って、自信持てないからしばらく様子を窺ってた」
新学期が始まって間もない頃、何度か亜季の視線を感じたのは思い過ごしではなかったようだ。
あの秋の日の出来事がどれほど自分の支えになったことか、となりを歩く亜季は知らないのだ。こちらは一方的に『運命の出会い』のように思っていたのだが、亜季はただ日常のひとこまとして記憶していたにすぎないらしい。気落ちしないわけではないが、それでもわずか一分そこそこの出来事を相手が憶えていてくれたことが、啓人には嬉しくてならなかった。
「ちなみに、俺が階段の奴だってわかったのっていつごろ？」
「カトセンが顧問になるちょっと前かな？　九十九くんと二人でギターのバッグしょって学校来るようになった頃。軽音が事件のせいで廃部寸前だったってことは聞いてたから、なんか苦労続きの⑧若人がいるなあって。だから、神山くんたちがカトセンに直訴したときはなんだか、『はじめてのおつかいを見守るママ』みたいな気持ちだった」
「……はあ。ママでしたか」
「うん。保護者同然」亜季は白い歯を見せてひとしきり笑ったあとで、ふいに真顔になった。
「ところで、あたしの泣き言を聞く時間はありますでしょうか」
真横からじっと見上げられ、啓人は出来損ないのロボットのようにコクコクと頷いた。
「え？　あ、はい。ありますあります」
「前に、なんで屋上にいたのって聞かれて、ただ出てみたかったからって答えたでしょ？　あれ、嘘じゃないんだけど、半分しか理由説明してない」
「じゃあ、残りの半分は？」
「もう、水泳部いやんなっちゃって」亜季は遠い日の思い出を辿るように目を細めた。「事件があってから※淑美ちゃんはカリカリしてるし、先輩たちはみーんなビクビクしてるしで、（　Ⅰ　）というか、部全体に息が詰まる感じが充満してて。だから、辞めちゃおっかなーって考えながら上からプール見てたの。五月でも前半のうちはまだ練習は自主参加だったから、サボろうと思えばいくらでもサボれたし」

「知らなかった」
「言わなかったもん、誰にも」
誰にも言わなかったことをなぜ自分には打ち明ける気になったのか。その理由を知りたいと思ったがなかなかうまい言葉が見つからず、啓人は黙って自転車を押した。
亜季が続けた。
「空見上げて、プール見下ろして、ため息ついて——。そのうち変な人たちが階段に居ついてるのがわかって、しかも増殖して。鉢合わせしないように気をつけてたんだけど、ある日、音がしないから今日はいないのかなと思ってドア開けたら、いて」
「その変な人たちって、俺たちのこと？」
「もちろん。そしたらその変な人たちは、顧問が必要だってなったらキノコ頭の変な先生ひっぱり込んで、音がうるさいって言われたら自力で毒々しい色合いのカーテン作って、練習場所がどうしようもなく暑くなったら校長先生に直談判して、ついでに敵陣に特攻して淑美ちゃんと対決して——。なんかそういう姿を見るたびに、⑨あたしももうちょっと水泳部頑張れるかなーって気持ちにね、なっていったのですよ。こっそり支えてあげようなんて思ってたのに、いつのまにか自分が軽音を支えにしてた。……という見方もある」
亜季は照れくさそうに肩をすくめた。
（越谷オサム「階段途中のビッグ・ノイズ」より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　大野…亜季のこと。水泳部の部員で軽音楽部の理解者。
チューニング…楽器の音程を調整すること。
淑美…水泳部顧問で軽音楽部を認めていない。

問一　（　A　）～（　D　）に入ることばとして適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選べません。）
ア　ぴたりと　　**イ**　そろりそろりと
ウ　ぐいぐい　　**エ**　パンと

問二　——線部①「含みのある微笑み」とありますが、ここでの「含み」とはどのようなことだと考えられますか。自分のことばを使って三十字以内で書きなさい。

問三　――線部②「啓人は不思議な安堵を覚えた」とありますが、なぜですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　何を話せばいいのかわからず困惑していたが、亜季が何気なく声を発するのを聞いて、気持ちが落ち着いたから。

イ　万が一変質者が出たらと考えると心配だったが、亜季が不安がっていないとわかり、自分も気が楽になったから。

ウ　内心では緊張しているが、その素振りを見せまいと意識しているのは亜季も同じだとわかり、緊張が薄らいだから。

エ　話題をふれず困っていたが、亜季のように目に入るものを話題にすればいいのだとわかり、心配がなくなったから。

問四　――線部③「暑さだけが原因ではない」とありますが、暑さ以外の原因だと思われるものは何ですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　会話でうまく亜季を楽しませることができないので、伸太郎を引き止めて、三人で帰ればよかったという後悔。

イ　せっかく亜季の夢を実現させようとしたのに、実際は暑く、亜季を満足させてあげられなかったことへの反省。

ウ　当たり前の台詞しか返すことができず、亜季に一緒に帰りたくないと思われてしまったことへの落ち込み。

エ　五人でいたときは言葉がすらすら出てきたのに、亜季の発言に気の利いたことを返せなくなっていることへの焦り。

問五　――線部④「これはチャンスだ。何の？」とありますが、結果的にどのような引っかかりを解決するチャンスとなったのですか。一文で探し、最初の四字を書きぬきなさい。

問六　――線部⑤「怒ってる？」とありますが、亜季がそう思ったのはなぜですか。これについて説明した次の文の【　　】に入ることばを、本文中から十四字で書きぬきなさい。

啓人が【　　】な対応であったから。

問七　――線部⑥「恐竜並みのカロリー摂取量ですよ、あたしたちは」とありますが、使われている表現技法として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　反復法　　**イ**　倒置法

ウ　体言止め　　**エ**　反語法

問八　――線部⑦「なかなか重大な告白をしたつもりだったが、わかっているのかいないのか、亜季はあっけらかんと答えた」とありますが、亜季にとって啓人との出会いはどのようなものだったと推測できますか。本文中から七字で書きぬきなさい。

問九　――線部⑧「若人」を特別な読み方にして、ひらがなに直して書きなさい。

問十　（　Ⅰ　）に入ることばとして最も適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　優越感　　**イ**　高揚感

ウ　閉塞感　　**エ**　焦燥感

問十一　――線部⑨「あたしももうちょっと水泳部頑張れるかなーって気持ちにね、なっていったのですよ」とありますが、亜季がそう感じたのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　啓人たちが軽音楽部を立て直すために奮闘(ふんとう)しているのを目にして、自分も部員たちに働きかけて、水泳部を立て直せるだろうという自信がついたから。

イ　水泳部の雰囲気(ふんいき)がいやになり、辞めることを考えていたが、悪い状況(じょうきょう)を変えるために自分たちで行動している啓人たちの姿を見て、勇気づけられたから。

ウ　啓人たちが先生を巻き込んで積極的に動いているのを見て、軽音楽部を支えられるようになるためには、自分も行動力をつけないといけないと反省したから。

エ　啓人たちが軽音楽部のために水泳部顧問の淑美ちゃんと対決しているのを見て、自分も環境(かんきょう)を変えるために、淑美ちゃんと対決しようという決心がついたから。

三　次の熟語の組み立ての説明として最も適当なものを、後の**ア**～**カ**から選び、記号で答えなさい。

(1)　市営
(2)　握手(あくしゅ)
(3)　救助
(4)　収支
(5)　不備

ア　似た意味の字を重ねたもの
イ　意味が反対になる字を重ねたもの
ウ　上の字が主語、下の字が述語になるもの
エ　上の字が下の字を修飾(しゅうしょく)するもの
オ　上の字が動作、下の字がその目的語になるもの
カ　上の字が下の字を打ち消しているもの

四　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(1) 茶道（さどう）の流派について学ぶ。
(2) あの人は信用するに値しない。
(3) 顔を背けて反抗の意を示す。
(4) 寺の仁王像に見入る。
(5) ページ数の都合で割愛する。
(6) 無理が生じることをアヤぶむ。
(7) ケンチョウ所在地を調べる。
(8) オンコウな性質の犬。
(9) 好きな番組をロクガする。
(10) 文化祭の出しものをケントウする。